

第15回『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』（オンライン）

——スポーツの価値を再考する——

【第1回】

テーマ：「『東京2020オリンピック・パラリンピック』の意味を、もう一度考える」

講師：玉木正之氏（スポーツ文化評論家）

司会：平尾剛氏（神戸親和女子大学教授 ラグビー元日本代表）

日時：2021年9月18日（土）19:00～20:30

会場：Zoom ウェビナー



スポーツ界の幅広いジャンルから知見豊かな方々をお招きし、その指導論やリーダー論から人材育成のポイントを学ぶ『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』。第15回となる今年のテーマは「スポーツの価値を再考する」。感染症対策の観点から、昨年についてオンライン形式で実施。今回も

「Zoom ウェビナー」を活用し、スポーツ指導の現場に関わる幅広い方々を対象としたコーチング講座を開催します。

今期初回となる講座のテーマは「『東京2020オリンピック・パラリンピック』の意味を、もう一度考える」。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で1年延期された「東京2020オリンピック・パラリンピック」が閉幕し、史上初の無観客開催など異例づくめの大会となったのは周知の事実でしょう。世界のアスリートが重ねた力を発揮する姿に、「スポーツの『価値』とは何か…」を再考した人も多かったのではないのでしょうか。

スポーツの「価値」とは「それまでできなかったことが、できるようになること」と語ったのはSCIX初代理事長の平尾誠二氏。「できなかったことができるようになり、本人や周りの人に感動を呼び起こす瞬間こそが、『スポーツの力』」と語るのは昨年から本講座で司会を務めていただいている神戸親和女子大教授の平尾剛氏（元ラグビー日本代表）。その「スポーツの価値」の原点に立ち返り、「東京2020オリンピック」の総括や日本のスポーツの置かれている現状、これからの進むべき方向について、語っていただきます。

初回講師にお招きしたのは、本講座でもおなじみのスポーツ文化評論家・玉木正之氏。そして昨年同様、平尾氏によるナビゲートで講座を展開していきます。

平尾氏による挨拶で今期最初の講座が開幕。「私は親和女子大で教鞭を執る前は、神戸製鋼でラグビー選手としてプレーをしており、現役引退後は、本日のセミナーの主催者でもあるス

ポーツ NPO 法人 SCIX で、中高生年代の育成・指導にもあたっていました。そうしたご縁から、昨年より SCIX が主催いたしますオンライン講座の司会進行役を務めさせていただいています。時間にして 90 分ほどの講座ですが、お付き合いの程、よろしく願いいたします」と平尾氏による自己紹介の後、初参加の受講者に向け、本講座の主旨と、今回の講座のテーマ、そしてその背景について伝えられました。



「『東京 2020 オリンピック・パラリンピック』の意味を、もう一度考える」。このテーマについて語っていただく本日の講師・玉木氏がここで登場。冒頭では、玉木氏自ら、SCIX との関わり、なかでも、本講座に関しては第一回から登壇しているということ、さらには初代 SCIX 理事長・平尾誠二氏との関わりについて振り返ります。ここですかさず「平尾 2 世よろしく願いします（笑）」と初代理事長と同じ姓を持つ平尾氏にジョークを飛ばす玉木氏。平尾氏も「（初代 SCIX 理事長の）平尾さんは常に新しい考え方を創造していく

人でしたね」と生前の平尾氏の人となり語る玉木氏に同調しつつ、本題となる今日のテーマへ。

「オリンピック・パラリンピック前と比べるとすでに静まった感がある現状。しかし、きちんと検証することが大切」と平尾氏が問題提起します。これを受け、「『オリンピック面白い』という人が多かったが、私は、スポーツは面白いが、オリンピックが面白いというのは違うだろう。オリンピックが面白いのと、スポーツが面白いのとは別問題」と玉木氏。さらに「（東京オリンピック・パラリンピック 2020 開催によって）一世帯あたり 42 万円の負担があると試算されている。それだけの負担を強いてまでの価値があるのか？ もともとオリンピックを招致しようと言ったのは 3.11 東日本大震災の前なので、復興五輪などと謳われたがそもそも一体何のためにオリンピックを招致しようとしたのか？」と、東京オリンピック・パラリンピック 2020 開催に疑問を呈します。

ここで知見豊かな玉木氏ならではの、日本のスポーツ振興の歴史について語られません。

「日本のスポーツは、1964年東京オリンピック当時に作られたスポーツ振興法に基づいていたが、それは体育が元になっていた。それではダメだろうとスポーツ庁を作り、スポーツとしてやろうと。だが、財政困難な時期で予算がないので、オリンピックを招致してやろうということになった。体育の日はスポーツの日になったし、日本体育協会もスポーツ協会になった。当初の目標は達成した。あとはお祭りだった。だが、コロナだとかで、いろんなネガティブな点が露わになったのが今回の東京オリンピック」。

さらに、オリンピックとスポーツのいびつな現状について、「オリンピックを見ているんじゃないんだ。スポーツを見たいんだ」と平尾氏。絵画に置き換えて平尾氏がこう表現しました。「オリンピックとスポーツって、額縁と絵画みたいな関係だと思うんです。額縁が金ぴかに施されて素晴らしいなってなっているけれど、僕らはその絵を見たいんだと。そんな豪華な額縁いる？っていうね。もっと額縁をシンプルにすれば、もっと本来の絵画の素晴らしさが見えてくるはず。額縁がきらびやかすぎて眩しくて絵が見えなくなっている」。さらに「その立派な額縁を裏に返せば札束が隠されてるみたいなね」と玉木氏がその喩えにシニカルな風刺を施します。



玉木氏は、オリンピックの問題点は肥大化と商業化と名言。「商業化は1984年のロス五輪から始まったと思われるが、それは半分正しくて、半分間違っている」と玉木氏。モントリオールオリンピックでの大赤字、そこから一変して大儲けをしたロサンゼルスオリンピック。そこを転機に肥大化、商業化が始まったのだとか。ロサンゼルスオリンピックを機に放映権や聖火リレーにお金が絡むようになり、それに味をしめ、それ以降IOCがその手法を用いお金を儲けるようになったというオリンピックの商業主義が始まった歴史について語られました。

「その後どんどんオリンピックが大きくなっていき、悪循環を招いた。IOCの下にNGO団体を作り、その下にたくさん株式会社を作り、お金を動かす仕組みを作った」と玉木氏。

ここで、「1952年以降、日本がオリンピックにどのくらい関わってきたと思います？」と玉木氏が平尾氏に問いかけます。「え！？」と玉木氏からの突然の問いに少々不意を突かれつつも「ほとんど関わってこなかったということですか？」と回答。「いや逆です。戦前からオリンピック招致運動があり、戦後1952年以降オリンピックに日本がどれだけ関わったか。58年4か月間＝84パーセントも、オリンピックの招致活動、準備活動のためにオリンピックと関わっていたんです。もはやオリンピック病と言えるでしょう」と玉木氏が、日本とオリンピックとの密な関係を明かします。さらに「これは日本のスポーツ活動が貧困で、オリンピックがないとスポーツが文化として定着しない、予算がつかないということ」と続けます。このコメント

に対して「逆だと思っていたので正直びっくりした。オリンピックをきっかけにしてスポーツが発展していったんですね。オリンピックなくして、ここまで日本のスポーツは発展していない



ということですね」と衝撃を隠せない様子の平尾氏。この事実に平尾氏と同じ感想を持った受講者の皆さんも多かったのではないのでしょうか。

ここで見てきた問題としては、IOCによる肥大化、商業化ということと日本ではスポーツを発

展させるためにオリンピックが必要になっているということ。そこで、平尾氏がこのように提言します。「オリンピックがなくてもスポーツが文化として定着できるように、これをきっかけとして、スポーツとは何か？を考えないといけない。身近なところでは体罰指導、さらに、セカンドキャリアやスポーツ選手のメンタルの問題」。

そして、玉木氏は日本におけるスポーツが商業化含め、現在のようになった大きな原因の一つとして、メディアの問題を指摘しました。「ジャーナリズムがなくなってしまった」と、自身もジャーナリストとして一線で活躍している玉木氏だからこそ、人一倍強い違和感を感じていることでしょう。今回の東京オリンピック。パラリンピックに関して、その分かりやすい実例として取り上げたのが朝日新聞の一件。「オリンピック前に朝日新聞の社説で東京オリンピックはやるべきでないと言いながら、スポンサーは下りなかった。これはおかしい」と玉木氏。

また、皆さんもご存知の通り、高校野球は朝日新聞、社会人野球は毎日新聞、プロ野球は読売新聞、箱根駅伝も読売新聞。全てスポーツはメディアが中心に関わってきた歴史が関係しています。これを変えない限り日本のスポーツ界はまともにならないのではないかと、日本のメディアのあり方、ジャーナリズムに玉木氏は苦言を呈します。「スポーツは政治にもメディアにもいいように利用されているんですね」という平尾氏の言葉に、元ラグビー日本代表としても活躍したアスリートであり、今なおスポーツに携わっている平尾氏の様々な想いが透けて見えたのではないのでしょうか。

ここで、玉木氏が、とある海外ジャーナリストのコメントを紹介しジャーナリズムの必要性を説きます。

政府がなくて新聞のある社会。

新聞があって政府のない社会。

どちらを選ぶ？と。

そのジャーナリストは「新聞があって政府のない社会を選ぶ」と言ったのだとか。それほど本来ジャーナリズムは大事な事なのだと言木氏。

一方で平尾氏は「この現状を変えるためにはアスリートが気づかないといけない。この恩恵を受けているのは一体誰なのか？考えてみてほしい」と自身も元アスリートという身として、



アスリートに苦言を呈し、当時の自分をこう振り返ります。「自分は現役の時はどうやったと言われたら、情けない。全然知ろうともしてなかった」。さらにこう続けます「だが今、研究なども通しながら気付いて、危機感を覚えている。文化的な価値や社会においてどんな役割を担っているかアスリートが気付いていないと、この先もスポーツが利用されてしまう。誰にしわ寄せがいく

か？社会的弱者にしわ寄せがいく。時間はかかるかもしれないが、一つ一つ潰していかなければならない」。

そしてここから玉木氏から、日本の各種スポーツ団体についての現状、そしてとても興味深い改善策について語られます。

まず一つ目の提言。「協会などは男女別や、世代別ではなく一つの組織にするべきだ」ということ。最近日本でも視覚障害者のサッカーがサッカー協会に入るなど同じ組織になってきていますが、世界的にはそれがスタンダード。けれども、日本はその点でもまだまだ遅れていると玉木氏。

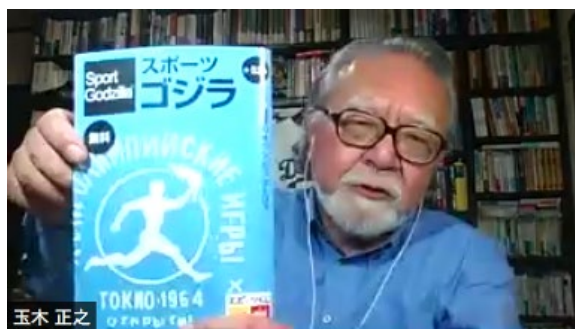
そして、衝撃を覚えた受講者も多いと思われる二つ目の提言がオリンピック、パラリンピックについて。オリンピック、パラリンピックは融合すべきだということは以前から一部で唱えられており、本講座でも玉木氏はじめ何度か語られていることではありますが、今回、目から鱗とも言えるアイデアが玉木氏の口から飛び出しました。「パラリンピックの中にオリンピックが含まれれば良いと思う。パラリンピックは障害の重度で分けられているので、健常者もその中に入って、障害のレベルがゼロというカテゴリーでやれば良い。義足、義手は彼らにとって日常生活に必要なもの、それはドーピングではない。これで健常者より記録を上回ったというのであれば、健常者が義足や義手を使いこなさきれないハンディキャッパーという位置付けになるわけです。

そうすることでスポーツを絶対化せず、相対化して捉えることができる」。

さらに「ボルトが走った後に、義足の選手が走り…という風になると、一体誰が一番速いのか？ということになってきて絶対評価でなく相対化されて、この人だけが一番ということにならなくなる。それこそが本来のスポーツの姿だと思うんです」と玉木氏。「僕もパラリンピッ

クの方が競技に打ち込む真剣さや、その雰囲気心が動かされた。僕は今までそういう発想がなかったんですが、今日その話を聞いてパラリンピックの中にオリンピックを組み込むというのは、ありやなって思いました」と、この画期的なアイデアに平尾氏も多めに賛同している様子。

さらに、ここからはオリンピックのあり方のみならず、スポーツのあり方にも話が及びます。「より速く、より高く、より強く。高みを目指すだけがスポーツなのか？パラリンピックを見ていると、そんな標語は必要ないのではないかと。比較対象の価値観で見るとはスポーツが大事になるように思う。スポーツで勝った人が偉いという認識も違うのではないかと」



と玉木氏。平尾氏も「自分の今の体でできることを増やしていく、超えていく。その姿に僕たちは感動する。そのことにパラリンピックを見ていて気づいた」と同調。これまで数々のビッグマッチを取材し、見てきた玉木氏曰く、一番感動したスポーツイベントは愛娘の運動会。平尾氏も同じ娘を持つ父親としてこう言います。「3歳の娘が日に日にできることが増えていくんです。片足でトントン超えていったりしてね。本人にとっては真剣なんです。誰かから見てではなくて、本人にとっての視点が大事。そういう風に見られると、スポーツはもっと面白い」。

金メダルを何個獲得した、決勝進出ではなくメダル確定などという表現にも違和感を覚えるというお二人のコメントに共感した方も多かったのではないのでしょうか。「オリンピックに幻想を抱き、メダル獲得に一喜一憂し大盛り上がりしたとしても、時が経てば忘れてしまう…そんな風に消費されていくのが今のオリンピック。肥大化し、商業化すれば消費というものが付いてくるのは当たり前。それはカルチャーではない、何も実らない。批判のないところに進歩はない。ジャーナリズムは批判する側に回らないといけない」と、オリンピックのあり方、メディアのあり方を玉木氏が総括しました。

会も残すところ20分を切ったところで、恒例の質問タイム。ウェビナーのQ&Aに寄せられた受講者からの質問に答えていきます。寄せられた主な質問、感想は以下の通り。

・玉木さんの「パラリンピックにオリンピックが吸収されるべき」というご意見に大賛成です。誤解を恐れず言えば、パラリンピックを見ていて「障害が無いことが障害ではないか」と思うようになりました。そう言う意味では「健常者」という言い方自体も、もう止めた方がよいのかもしれないですね。

・玉木さんの「より高く、より速く、より強く」「より美しく・・・」への違和感、共感できません。平尾さんがおっしゃられていた相手へのリスペクトは「何か」と戦おうとしていることへのもののように思えます。それは対戦相手だったり、自分自身だったり、山頂だったり・・・。その意味で「より何とか」の「何とか」を自分で決めて、自分自身にチャレンジすることに感動と敬意が生じるように思われます。

・4年後のオリンピックは変わるでしょうか？ 変えようという動きは起こるでしょうか？

・LGBTQについても、もっと語り合わなければいけませんね。

・表敬訪問については、メダルを獲得した選手だけでなく、出場した選手すべてが行うべきではないかと思えます。むしろ、市長など行政のトップが選手のもとに向かうべきではないかと思えます。

・学校での体育教育に対するオリンピックの影響について、どうお考えでしょうか？

・「スポーツ」がこれだけメディアに政治に利用されているマトリクス(世界)から、脱出する術は、どこにあると思われますか？

・ブリスベンではローンボウルズを種目に入れるという考えを、オーストラリアローンボウルズ協会が出しています。それまでに日本でももっとローンボウルズの知名度を高めたいと思っています。

・保健体育の教科書にオリンピック選手のグラビアが満載されていたり、オリンピックを「礼賛」するような内容に偏ってしまっていることについて疑問を感じています。

・観られるスポーツ=消費されるスポーツが、スポーツの価値を高めるという点は否定できないとも思えるのですが… 反対する側の論理が知りたいです。私はスポーツの価値は、人間(その人)の限界を少しでも超えようとする意志、を目の当たりにすることの感動、だと思っています。より速く…については、「より良く」は個々人の思いとしては、あって良いと思っています。

・オリンピックのような4年に一度の大イベントへの疑問には共感できます。同様にラグビーやサッカーのワールドカップも否定されるべきなのではないでしょうか？

参加者の皆様から沢山のご感想、ご質問をいただきありがとうございました。これにて今期初回のインテリジェンス講座は閉幕となりました。時間内に回答できなかったものについては後日 SCIX の Facebook ページなどを通じて、可能な限りお二人からのコメントをフィードバック出来ればと思っております。

今回もオンラインで開催いたしましたインテリジェンス講座、多数の皆様にご参加いただき、ありがとうございました。楽しく有意義な時間を皆様と共有できましたこと、大変嬉しく思っております。

次回は 10 月 2 日（土）19:00 より、関西学院大学アメリカンフットボール部前監督・鳥内秀晃氏と、京都産業大学ラグビー部 GM でラグビー元日本代表の元木由記雄氏をお迎えし、今回同様、司会を務めていただく平尾剛氏とともに、『「学生スポーツが目指すべきもの」とは何か』をテーマに開催させていただきます。次回も多数のご参加お待ちしております。

（レポート 中野里美）

スポーツ振興くじ助成事業

